

第 66 話〈近隣鉍山〉の要約と参考資料

第 66 話〈近隣鉍山〉の要約

1925（大正 14）年、西臼杵郡に 7 カ所の亜ヒ酸鉍山がありました。鉍山業と縁のなかった会社や事業家が、亜ヒ酸景気に乗って儲けを企てたのです。昭和に入って不景気になると、鉍山跡を放置して去っていきました。今、亜ヒ酸の歴史は生い茂る草木に埋もれています。

第 66 話〈近隣鉍山〉の参考資料

6 6 - 1 島根県の亜硫酸鉍山

「日原（にちはら）町史 近代下巻」（1979 年 8 月）P122 より

鹿谷銀山

鹿谷銀山は大正 10 年頃九州から山本佐市がきて採掘した。山本は日原駅で下車して人力車にのって鹿谷へ来た。俵夫は池田であったが鹿谷へ人力車が来たのはこれがはじめのしまいであった。

はじめは銀が出るというので「鹿谷銀山」といって鉍石を九州へ送っていたが、亜硫酸の含有量が多いので亜硫酸をとることにした。亜硫酸の含まれている鉍石は臭いので除けておいたのを、のちにはとって亜硫酸をとった。

亜硫酸は鉍石を小さく砕いて石灰を焼くようにして焼き、それから出る煙をいくつもの室を通して煙突から出す。煙道はくねくねと曲っていて、煙が室を通る間にまっ白い粉になって室にたまるのをとるのである。これに従事する者は手足を包んで目ほど出し、亜硫酸にふれないようにしていたが、それでも睾丸が被害をうけた。小便をする時手についたのがつくからである。亜硫酸は石油箱のような木の箱に詰めてかるうて青原駅へ出した。大正 11 年に道路ができてからは馬車で出した。

鉍山は 5、6 年間人夫を使って盛んに採掘した。煙のあたるところは松でも色が悪くなった。それから 10 年間くらいは稲が出来なかった。弁償するという契約はしたがとうとう一文にもならなかった。津和野から技師がきて調査し指導してくれたが、よく腐熟した厩肥と新土を入れよ。柴草位では駄目だといった。今でも水とおしは稲ができない。下流の大本では昭和 18 年の洪水で鉍毒が田にはいり稲ができなくなった。

（鹿谷 西村貞一談）

6 6 - 2 吹谷鉍山

福岡鉍山監督局管内 鉍区一覧より

大正 14 年 7 月 1 日現在

65号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪
渡辺録太郎 東臼杵郡恒富村大字恒富北 1352

昭和5年7月1日現在

65号 岩戸村 吹谷鉾山 銀、銅、鉛、亜鉛、砒 236,640 坪
昭和4年 亜ヒ酸 3,937 キロ 渡辺録太郎

宮崎県統計書より

大正14年	採鉾	精鉾	製出高 (亜砒酸)	製品販売高
吹谷鉾山	14,000 貫	12,100 貫	8,500 斤 701 円	—

昭和4年

吹谷鉾山	27 トン	—	3,937 キロ	461 円	3,937 キロ	164 円
------	-------	---	----------	-------	----------	-------

本邦鉾業の趨勢より

大正14年 休止セル鉾山

佐藤実雄さんの話 (1978年2月15日聴取)

4番坑より上に、梨の木抗という坑内を持って掘っていた。梨の木抗では、昭和4年4月に3人が生き埋めになった。

66-3 惣見鉾山 (アンチン山)

宮崎県統計書より

明治24年

惣見鉾山	鉾場位置	鉾種	坪	鉾品ノ前年ヨリ繰越高	採掘高	製品代価	借区人
	岩戸・本谷山惣見	安質母尼	5,716	39,500 貫	10,456 貫	103 円	木村復次

大正8年

惣見鉾山	採鉾高	鉾石販売	製出高	製品販売高
銅	78,300 貫	—	—	—

福岡鉾山監督局管内 鉾区一覧より

大正14年7月1日現在～昭和3年7月1日現在まで

登81 岩戸・上野 惣見鉾山 759,000 坪
大和鉾業株式会社 大阪市東区和泉町2の1

66-4 茅野 (萱野) 鉾山

日本鉱床誌9 九州地方より (P392)

宮崎県西臼杵郡高千穂町登尾の東方 1km にあり、明治 43 年 (1910) 藤田組によって開発され、大正 11 年 (1922) 再開して数年間砒鉱を採掘し亜砒酸を製錬したが、その後中止された。

大正 12 年 本邦鉱業の趨勢より

新ニ事業ニ着手セル鉱山

宮崎採 7 (茅野) 銀・銅・鉛・砒 岩戸村 株式会社山本商店

本邦鉱業一般より

亜砒酸

鉱業権者

大正 13 年 156,179 斤 (93.707t) 32,127 円 株式会社山本商店

大正 14 年 113,651 斤 (68.190t) 12,502 円 株式会社山本商店

大正 14 年 本邦鉱業の趨勢より

茅野 株式会社山本商店 亜砒酸 113,651 斤 12,502 円

大正 15 年 本邦鉱業の趨勢より

事業を縮小シ又ハ休止シタル鉱山

茅野鉱山 銀・銅・鉛・亜鉛・砒 岩戸村 株式会社山本商店

亜砒酸市況不振ニシテ需要殆ド絶ヘタルヲ以テ採鉱ヲ中止シ前年度越高 5804 貫ノ粗鉱ヲ処理シタルノミニテ 5 月限休山セリ前年度産産ニ対シ 9 割 4 分減ナリ

福岡鉱山監督局管内 鉱区一覧より

昭和 4 年 7 月 1 日現在

登 7 岩戸 銀・銅・鉛・亜鉛・砒 67,100 坪

藤田鉱業株式会社 大阪市北区堂島北町 20

佐藤実雄さんの話 (1977 年 1 月聴取)

川田のころ、小竹武平という人がおった。事務所におったり、亜ヒ焼いたりしよった。川田といっしょに住んでいて、独身で、丸顔の 10 人並み以上の美男子。茅野鉱山が始まったとき、川田は小竹を責任者として回らせた。ハルエさんが鉱山に出た大正 14 年、小竹は茅野鉱山にでていた。

66-5 乙ヶ淵 (音ヶ淵) 鉱山

日本鉱産誌 II P172 より

1907年（明治41年）には、新潟県川内鉱山及び日出谷村で硫化水素、宮崎県乙ヶ淵鉱山・大分県瓜谷鉱山で亜砒酸、大分県大切鉱山・北海道大道鉱山で鉱石を産し、年産合計亜砒酸12.3トン、硫化水素7.8トンの産額があり、この頃が砒鉱として初めて開発された頃であった。

通産省「九州の金属鉱業」P291より

明治41年ごろ、大分県の矢野与一氏が亜砒酸の製造をしたことがあり、焙焼炉および鉱滓などが数カ所に残っている。

戸高武重さんの話（1980年頃聴取）

- ・宝暦年間に先祖がここへ移って来た。ここにきて4代目が鉱山を発見した。水無の奥の重内（おもうち）で鉱山を発見して錫をとっていたらしい。
- ・豊後の木浦、見立、大吹、重内、どこも標高400メートル～800メートルに並んでいる。乙ヶ淵鉱山の鉱脈は、いま豊栄鉱山とつながっている。
- ・嘉納鉱山で50年くらい前に亜ヒ酸をとった。いい錫が見つかったので、見立に持っていき選鉱した。
- ・私とこがやった乙ヶ淵鉱山は、ここから3キロ奥。亜ヒ酸を掘った乙ヶ淵は別。
- ・大吹鉱山で大正14年頃、亜ヒ酸の煙害で木がやられたので見て回ったことがある。
- ・諸和久（もろわく）でも大正末～昭和初に亜ヒ酸を焼いたのを覚えている。

日之影町史4 資料編2 村の歴史（P540～541より）

乙ヶ淵（おとがふち） 県道日之影・宇目線沿いにある乙ヶ淵キャンプ場の吊橋を渡り500メートルほど登ると標高600メートルの斜面に現在1戸ある。江戸時代後期から鉱業に従事していた古い歴史の家である。

戸高姓の由来 往時、先祖が夢をみて10羽の鷹が宮を飛び回り、やがて鷹は北の^{おもうち}重内の方向に飛び去った。この方向に鉱石があると夢に見てから、その方向の山に鉱石を探し廻った。すると、酸化した露出の錫鉱脈を発見した。これを嘉納鉱山という。彼は喜んで錫石を延岡藩主内藤家に貢ぐと、内藤家は大変喜び彼を鉱山の御用係に登用したという。以後、彼は家で鷹を大事にし、永く鷹の恩を忘れないため姓を「^{とおたか}十鷹」とした。これがいつのころからか「戸高」姓になったといわれる（『見立郷土誌』）。一方、乙ヶ淵戸高家の系図には、戸高家の祖は上の原の戸高家の分家と記されている。

乙ヶ淵鉱山 明治41年（1908）大分県の矢野与一が亜鉛を目的として開抗し、亜鉛鉱75トン、砒鉱75トン、重石1.5トンを年産したという。第1次世界大戦の頃（大正4～7年）、スイス人のシー・ファーブル・ブランドがこれを買収し約3年間稼行した。この時が本鉱山の最盛期で多数の住宅が建ち並び、家族共に約300人が住んでいたという。当時の生産量は不明である。

66-6 大吹鉦山

高見保さんの話（1972年2月聴取）

日之影町川詰の川向うに銅岳という山を越えていくと、大吹鉦山がある。徳川時代に鉦山があり、従事していた者の墓が50内外あって、錫を焼いたころ、その滓が残っていた。

その跡で亜ヒ焼きが始まった。私が20歳のとき（大正15年？）、美々地の人が請負って、錫鉦と亜ヒ鉦とが兄弟鉦で、窯をつくって焼いた。

横井英紀「廃坑に行く①」（「鉦毒41号」1980年9月10日）

いくつかの小さな岩屋をへて更に登っていくと、右手に亜砒焼をした窯跡がみえる。焼ガラは谷川まで達している。谷川沿いの部分に野石で築いた石垣が数段生まれ、焼ガラが拡がるのを防ごうとしたあとがある。焼ガラは幅30メートル、長さ10メートルにおよび、草1本はえていない。亜砒焼窯は残っていないが、焼ガラの上手に野石などが多くころがっており、窯跡とわかる。

66-7 諸和久鉦山

横井英紀「廃坑に行く①」（「鉦毒40号」1980年6月10日）

部落にすむ古老の話によると、諸和久鉦山は銅山として開山、大正6年頃から大正13年の間亜砒鉦山として操業。高橋宝三という大分の男が延岡に会社をおき、真鍋友一という責任者のもと30名程が働き、当時は事務所や社宅など設けられていた。村人は炭を焼き、野菜・トーフ・コンニャクなどつくり売っていたという。社宅のあった場所は杉山となっており、丁度間伐をしているところだった。

その左上手に窯跡はあった。幅6メートル、長さ30メートルにわたるズリ・焼ガラは2本の赤い帯となって新緑のなか異様な姿をみせている。半世紀以上もすぎた今、鉦山草といわれるシダが宙にうきながらも必死になって大地にしがみついている。その姿がところどころみえるだけである。ズリ・焼ガラの最上部に粗製窯2基、精製窯1基あったといわれるが、土呂久告発後とりこわされ、今はハゼの木が植えられていた。

再び林道にもどり車で数分、林道の終点まで走る。更に谷川ぞい約200メートル登ると写真下の窯があった。約35度の斜面にそって全長41メートル、幅9メートル。石築の粗製窯である。いわゆる夫婦窯の縦中心線上にもう一列収砒室をのせ、威容を誇る姿だ。この窯は収砒室が15個と多い。

更に上手に隣接して1基。この窯は全体に小ぶり。収砒室が広く、斜面利用がないなどから精製窯と判断。周辺をよくみると少量ながら焼ガラ有り。窯に顔をよせると特有の臭気。短期間だとしても、やはり亜砒焼が行なわれているようだ。

私はこれらの窯をみて、その石築の確かさに驚いた。かつて石築は城壁であり、山村の水田を支える石垣であった。その石工の術がこの窯にも生きている。ひとつ、またひとつと石を積み重ね垂砒窯を築く石工たち、それがたとえ死の窯だとしても、己が術の確かさを確認してゆくしかない石工たちに、二律背反した想いを感じる。

66-8 黒葛原 鉦山

横井英紀「廃坑に行く③」（「鉦毒 40 号」1981 年 2 月 10 日）

調べているうちに、黒葛原の谷すじには黒葛原鉦山、中ノ内鉦山、萱野鉦山とあることを知らされた。今は、黒葛原のズリ跡をのぞけば、そのほとんどが判らなくなりつつある。現に、黒葛原の垂砒窯跡は杉の植林が始まって 4 年目。窯を壊しその上に覆土し杉をうえる。(略)

66-9 水無平鉦山

福岡鉦務署管内鉦区一覧（大正 13 年 7 月 1 日現在まで）

福岡鉦山監督局管内鉦区一覧（大正 14 年 7 月 1 日現在以降）より

1. 大正 13 年 7 月 1 日現在福岡鉦務署管内鉦区一覧まで、水無平鉦山の記載はない
2. 大正 14 年 7 月 1 日現在福岡鉦山監督局管内鉦区一覧に水無平鉦山が登場する

(村) (鉦山名) (鉦種) (面積) (大正 13 年鉦産)

採登 97 岩戸 水無平鉦山 金・銀・銅・錫・砒 489,700 坪 垂砒酸 546,800 斤
(鉦業権者) 中島正男 大分県南海部郡佐伯町 342 月本組

*大正 13 年の鉦産の垂砒酸 546,800 斤=328 トンは多すぎる。宮崎県統計書では、大正 12 年に垂砒酸 114 トン、13 年に 75 トンとなっている。

3. 大正 15 年 7 月 1 日現在福岡鉦山監督局管内鉦区一覧によると、
大正 14 年の鉦産は、砒精鉦 117,447 貫 (=440.4 トン)
他は前年と同じ
4. 大正 15 年・昭和元年現在福岡鉦山監督局管内鉦区一覧によると、
大正 14 年の鉦産は、砒精鉦 39,100 貫 (=146.6 トン)
他は前年と同じ
5. 昭和 2 年から昭和 9 年までの福岡鉦山監督局管内鉦区一覧には、
鉦産の記載はない。つまり閉山していたが、鉦業権者は中島正男になっている。
6. 昭和 10 年 7 月 1 日現在福岡鉦山監督局管内鉦区一覧で、
鉦産は記載なし。鉦業権者は中島正男から松尾一男に代わっている。
松尾の住所は、西臼杵郡岩戸村岩戸 3395 (土呂久内) である。

大正15年 本邦鉍業ノ趨勢より

砒鉍業 本邦亜砒酸ノ最大消費国タル米国ニ於テハ綿花事業不況ノ為メ、我カ亜砒酸市況ハ、依然トシテ不振ノ域ヲ脱スルニ至ラス、従テ、各鉍山共ニ生産^{ならび}ニ販売ヲ手控ヘ本年度ハ全ク不況裡ニ終始セリ。即チ岩手県甲子鉍山ニ於テハ製鍊ヲ継続セリト^{いんごも} 雖、^{わずか} 纔ニ^よ 余喘^{ぜん}ヲ保テルニ過キス。栃木県足尾鉍山ハ、前年ニ比シ粗製亜砒酸約9割4分、精製亜砒酸約2割2分減産シ、岐阜県神岡鉍山ハ、同シク精製亜砒酸2割2分ヲ減産セリ。又、岡山県築瀬、山村、日吉ノ各鉍山ハ、何レモ休業スルニ至レルノミナラス、九州地方ニ於テハ、当業者ノ殆ト全部カ其ノ事業ヲ休止シ、唯、大分県佐伯町金子製薬所ニ於テ薬品トシテ亜砒酸9万余斤ヲ製出セリト雖、而モ前年ニ比較スルニ実ニ9割3分ヲ減産セルノ状態ナリ。

村山高著「世界綿業発展史」P425~439

(A) 戦後のブーム

戦後の米綿価格は世界綿製品価格に大きな影響を与えるとともに、また逆に綿製品価格変動の影響を敏感に受けた。

1919年の綿作は肥料と労力の供給がともに未だ戦時中の不足より脱することができず、植付反別も終戦後の相場下落のため減少、加えるに天候不良のほか虫害もあり、収穫量は前年の1202万俵から1141万俵へと減少した。このため綿花価格は上下に変動しながらも上昇傾向を辿り、ついにニューヨーク綿花取引所のミッドリング平均価格は、11月、12月に封度当り39仙台の高水準に達した。

1920年に入ってから綿花相場は上昇を続け、4月には42仙台の戦後最高水準に達したが、これは主として米国および海外における綿製品価格の急激な上昇の結果である。1919年の大部分と、更に1920年に入ってから米国の綿製品市場は、顕著な通貨および銀行信用の膨張、その結果生じた種々様々のスペキュレーションによって、強い影響を受けた。(略) このような世界的な綿製品価格の上昇は当然米綿価格に影響せずにはおかなかった。

(略) この間米国紡績業の状態はどうであったか。工場綿花消費量は、1918-19綿花年度には、前年度の水準657万俵を80万俵下回ったが、1919-20年度には再び642万俵に回復した。また海外の旺盛な需要に応じて綿糸布の輸出も増大し、綿糸は1919年の2070万封度から1920年の2410万封度に、綿府は1919年の6億8300万碼にそれ

ぞれ増加し、特に綿産は戦時中の最高水準をも上回り、新記録をつくった。

(B) 戦後の恐慌とその連鎖反応

米国綿紡績業が戦後のブームを謳歌したのも束の間、1920年の初秋には深刻な恐慌に突入したが、この恐慌は国際的且つ繊維相互間の連鎖反応を示しつつ襲来した。

(略) 米国の恐慌はついで欧州にも波及、この年の秋が深くなるまでに、英国および欧州諸国の消費財製造業では、生産縮減、価格の下落、先物生産の見込み違いが、それぞれ拡大して行ったが、この現象は繊維工業特に綿業に甚しく、法外な繁栄の絶頂から、かつてない不況と困難のどん底に真逆様に落込んだ。

(C) 第二次世界大戦に至るまでの米国綿業

- a. 綿花過剰化と綿花政策 第一次大戦後のブームとその反動恐慌を経験した米国綿業は、その後どのような推移を辿ったか。1921年に800万俵の水準を割り、それまでの最高記録であった1914年の実績1600万俵の50%に低下した綿産量は、順調に回復して1926年には1797万俵と最高記録を更新、その後は年によって大幅な変動をみたものの、1937年に1894万俵という今日に至るまで米国綿作史上未曾有の収穫量を記録した。しかしこの間世界の他の地域における綿作の発展により、全世界綿花収穫量に占める米綿の地位は低下し、1891年には4分の3を占めたのが、1933年以降は2分の1以下となり、1937年には39%に止まった。

また米国の綿花収穫面積—harvested acreage で作付面積 planted acreage ではない—は、1925、6年頃をピークに、その後は綿花の増産にもかかわらず減少し、1937年のそれは1916年とほぼ同水準であった。これは綿花技術の向上のほか、後述する米国政府の綿花政策の影響もあって、単位収穫面積当り収穫量が増加したからであり、1エーカー当り綿花収穫量は1920年代には200封度を上回ることはなかったが、1937年の如きは269.9封度にも達した。

綿花の輸出量は、1926-27綿花年度に1130万俵という空前絶後の高記録をつくったが、その後は世界の他地域における綿花増産に加えるに、第一次世界大戦を契機として米国が世界の債権国となったこと、米国輸入関税の引上げなどが、折柄の世界恐慌と結びつき、欧州諸国の米綿輸入能力が低下したため、第81表の示す通り減少、1934年以降は5乃至600万俵の水準に止まり、1938-39年度には僅か351俵に過ぎなかった。

しかも米国内における綿花消費量は、むしろ停滞気味で、到底輸出の減少を補うことはできなかったから、米国における綿花生産過剰化が漸次表面化するに至った。第88表によると、米国の期末米綿持越量が、1930年代に入ると急増し、1932年8月

には、遂に 958 万俵の高水準に達した。このため米綿作農民の綿花 1 封度当り平均受取価額は僅か 6 仙前後の水準に低落し、農民の綿花による名目所得は、既に不十分とみられた 1920 年代平均の 3 分の 1 を僅かに上回るに過ぎぬ状態となった。(略)そして綿花については、価格安定の対策が 1929 年 10 月から講じられ、一時的には下落防止の効果もあったが、綿花の生産制限を伴わなかったため、結局失敗に終わった。

このようにして遂に「1933 年農事調整法」The Agricultural Adjustment Act of 1933 の制定をみたが、この法律はルーズベルト大統領が 1933 年以降展開したニュー・ディールの一環をなすものであり、これによって非常事態克服のための政府の権限は強化され、(1)市場価格引上げのための綿花生産および出荷の制限、(2)過剰綿花の一時的な市場からの隔離、(3)政府の計画に従う農民に対する報償金の支払という三つの主要対策が可能となった。そしてこの法律が最初実施されたのは、既に綿花の作付期を終わってからのことであったため、成育途上の綿花の抜取りも敢えて断行され、結局収穫面積は作付面積の 25%減となり、1933 年度における農民の綿花 1 封度当り平均受取価額は、第 88 表の示す通り 10 仙台に回復した。

更に翌 1934 年には、綿花作付面積制限を加えるに西部綿作地帯の旱魃もあり、綿産量は前年に比べ約 340 万俵減少した。また 1935 年には農民がその耕地のうち、最も地味の貧しい部分を作付制限地にあて、残余の部分に施肥と耕作を集中するようになったため、単位面積当りの綿花収穫量の増加を招くということもあり、綿産量は前年に比べて 100 万俵増大したが、それでも 1000 万俵台の水準に止まった。

しかし 1936 年に至ると、1933 年農事調整法は最高裁判所によって違憲の判決が下され、またバンクヘッド法による割当超過分に対する課税も不可能となった。このため別に「1936 年土壌保全および国内割当法」Soil Conservation and Domestic Allotment Act of 1936 が制定され、耕地の土壌保全と改良のため綿花作付を削減する農民には引続き報償金が支払われ、また 1936 年の綿作は大旱魃による影響を受けたが、新法によっては積極的に作付面積を削減し、綿花の減産を招くほどの効果は期待されず、綿産量は 1934 年を底として再び上昇に転じた。

尤もこの間綿花の国内消費量が第 81 表の示す通り大幅に増大したため、米綿の期末持越量は漸減し、1936 年度の農民受取価額も前年より僅かながら上昇した。この結果 1937 年には、1355 万俵の収穫が最初政府の目標とされたにもかかわらず、農民の綿作意欲は高揚して作付反別は更に増加をみたほか、単位面積当りの収穫量も増大したため、この年には実に 1900 万俵に近い未曾有の収穫量を記録し、綿花価格は

再び大幅に下落、翌 1938 年 8 月 1 日現在の綿花在庫量は、1 年前の 2.6 倍にあたる 1144 万俵に激増した。

このような状態に陥ったとき、先行の諸方策に比して、より包括的な農業政策遂行のため「1938 年農業調整法」の制定をみた。この法律は(1)綿花植付反別の割当とともに、(2)超過生産に対する課金制度を持つ出荷割当、(3)土壌保全のため地味培養作物または用途に転換した反別に対する政府報償金の支払によって、積極的に綿花収穫量の減少を計ったほか、(4)価格支持制度をも確立し、パリティ価格を基準に需給関係をにらみあわせて綿花の支持価格が決定され、この水準による政府（商品金融会社）の融資が行なわれることとなった。

このような政策の結果、1938 年の綿花収穫量は、前年よりも約 700 万俵という大幅減少を招き、約 1200 万俵にまで低下した。しかしながら、この綿花年度の融資率 8.3 仙（ミッドリング 8 分の 7 インチ）は、綿花の世界価格よりも割高であったから、第 81 表の示す通りこの年度の綿花輸出量は、僅か 351 万俵と第一次大戦後の最低を記録、国内消費量を合わせても、減少した収穫量になお約 150 万俵もおよばなかったため、1939 年 8 月 1 日の米綿在庫量は 1300 万俵に近い史上最高を記録した。このため米国議会は、遂に綿花に対する輸出補助政策を決定、1939 年 7 月 1 日に「連邦余剰商品会社」Federal Surplus Commodities Corporation は、輸出綿花 1 封度当り 1.5 仙の輸出補助金を支出することとしたが、その結果は、欧州における戦争勃発と相まって、急速に米国の余剰綿花を減少せしめることとなった。